

市川様

# 光学天文連絡会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

会 報 No. 23

1983-5-31

光学天文連絡会事務局 (東京天文台・木曾観測所) 発行

光学天文連絡会第5回総会メモ

日時: 1983年5月18日 18:15 - 20:30

場所: 調布市福祉会館小ホール

出席者: 57名

議長: 田中 清

議事:

I. 1982年度会務報告(田村)

1. 総会(才4回) 1982年5月20日(東京)

懇談会 1982年10月14日(熊本)

2. 運営委員会

才11回: 4月14日

才17回: 11月8日 (光天望遠鏡将来計画シホ)

才12回:

才18回: 11月10日

才13回: 5月21日

才19回: 12月10日

才14回: 6月16日

才20回: 1983年1月10日

才15回: 7月23日

才21回: 3月23日

才16回: 9月28, 29日

3. Working Group

望遠鏡WG, 体制WG, 国際協力WG, 海外中口径WG

4. 才2回将来計画シンポジウム 11月8-10日

(光天望遠鏡のめざす天文学: 集録発行)

5. 会報 No. 13-22

6. PR用パンフレット作成

7. 新運営委員(1983年度)選考 (結果: 会報 No. 20) 及び会員名簿発行

8. 会計報告

光学天文連絡会 / 1982年度会計報告

取 入

△はマイナス

1982年度会費 (142名分)

142,000円

1983年度会費 (12名分)

12,000円

振替払込料金 (加入者負担分)

△2,930円

① 収入合計

151,070円

(1982年度会費未納3名)

支出	
通傳料 (主として会報郵送料)	109,160円
リコピー用紙 (B4, 11冊)	14,432円
郵便 (B4, 6000枚)	7,440円
封筒 (各冊)	7,680円
会費名簿印刷代 (200部)	17,000円
謝礼 (会報印刷)	10,000円
ゴム印	1,200円
振替口座加入料	50円
② 支出合計	166,962円

前年度 ① - ② ▲15,892円

東北大学・理学部・天文学教室  
光学天文観測会事務所

## II. 活動報告 (小暮)

### 1. 全体的総括

・苦悩の年。 ・東京天文台から新しい動きが出た。 ・充足時の方針から変更が  
あつた。

### 2. 活動内容

・基本方針の具体化 ・各WGの活動 ・天文内外の他分野へのPR

### 3. 経過説明 (会報 No. 14 - 22)

・6月 三本柱の相補性, 重要性, 緊急性を強調  
天文研連, 東京天文台長への要請文 (No. 15 - 16)

#### ・出た問題点

- (a) 三本柱の一体性は? スタッフ・バイ・スタッフではたぬか?
- (b) STや既存の大口径との関連で, 世界的に見た光天連案の位置づけは?
- (c) 日本の各種計画の中でどの位の priority をもつものか?

・9月10日: 拡大研連 (No. 17)

国内3mの scientific output 及び国内と国外の優劣等の議論  
他分野の計画も示された。

・9月28-29日: オ16回運営委員会 (No. 17)

拡大研連での議論, 研連の考えとどう受けとめるかで意見が分れた。

基本的考え直し ← vs → 国内3mのサイエンスときらんとつのは良いのでは。  
運営委は後者の考えを諒解 → レンボジウム

・11月8-10日: 光天連望遠鏡将来計画レンボジウム

国内3mを中心にして, 三本柱の相補性, 一貫性を検討するレンボジウム  
枠があつた (国内3mで何ができて何が調べ, 光天連計画の裏付けをする)

## 合意 三本柱計画を進む

分光に重点を置き, 銀河や, 星の形成領域の研究を行う  
アクセスの良さと生かし, 技術開発等で気象条件の悪さを克服

→ 光天連の目指す天文学 (No. 18)

・12月26日: 東京天文台内屋営委員 (7-8人) 三本柱案と確認

・1月11日: 天文研連シンポジウム

4つのレビューと半日の自由討議 (No. 19)

・1月12日: 天文研連

各分野の計画に一応の評価を与えた。 「光学系外天文関係者が長期計画をまとめたか  
……オ一步と踏み出すことと勧める」 → 小平氏の手とめ: 多くの問題があるが,  
現状から早急にオ一步と踏み出す必要, 幅広い可能性を残す。 光天連の精神は尊重さ  
れる。 → 光天連としては従来の方針で進んで良いと判断し, パンフレット作成 (磯部氏)

・1月-3月: 東京天文台有休で新しい動き = 海外の可能性の模索

・3月22日: 新運営委員の選挙 → 結果 (No. 20)

・3月23, 24日: オ21回運営委員会 (No. 21)

東京天文台有休 → 三本柱に対する問題点の指摘

(a) 国内3mの scientific output に魅力がない。

(b) 東京天文台をとりまく状況の変化

海外設置の問題が考えていたほど難しくない

台長から, 打診の際国外の可能性も含めて良一かという問合せがあつた。

これは従来の方針の大変更の可能性を秘めている, すなわち

① NTTはどうなる? (b) 国内に緊急に欲しいと、その点は何? (c) 京都が

これまで行、てきた海外設置の努力はどうなる? (d) 全国で数年間に亘、て議論

したことの意味は? (e) 状況変化のタイムスケールは従来の評価よりどれほど短

くならたのか?

・5月9日: オ22回 (新旧合同) 運営委員会 (No. 22)

前回出た問題と再度議論した。

(a) 国内3mを中心とした三本柱案と光天連が推進するのはかなり難しくなつた。

(b) 運営委員会はこの計画に重大な問題点のあることを認識した。

(c) 83年度の活動方針について成案と得られなかつた。

(d) 光天連の精神は衰、ていないが, この事態に対し, 運営委員会は何らかの対応と  
つづける必要がある。

## III. 一級討論

舞原: 三本柱計画が難しくなつた二番目の理由 (光天連内で充分な推進体制ができて  
た) についてもう詳しく。

小暮: 実際にはまとま、ていないのにまとま、たように見えていた。 レンボとやらに

異議、其意見が出た。12月26日に東京天文台内の運営委員が集まり、推進体制を作ることになり、していた。しかしその後また東京天文台内で異議、其意見が出た。これでは充分な推進体制ができていないと言っている。

議長：東京天文台の人で誰か説明として貰えないか。

小平：12月26日に天文台内運営委7名が集まり、その時は、かなり複雑な議論はあり、だが、三本柱計画を進むということに意志統一をした。しかし本質的に所が、足りていない。この部分の今後の研究での議論を通じて拡大され、考え方のスベクトルが広がった。

藤原：研究の反転は、過去と比べると1月はpositiveであり、た。

小平：そう思う。拡大研究の時に最も厳しかった。その後、課された宿題の答を作った。そして「オーストリア」という表現もできた。天文連の要求や姿勢に対しては同情的であり、だが、内部の基本的問題（口径等）の解消ができていない。

議長：運営委員会が責任とどういふ話があるので、ここで選挙結果を報告し、事務局の引継ぎを先に済ませておきたい。

田村：新運営委員の発表（cf. No. 20） 投票率 約50%。  
事務局は東北大理 → 東京天文台本管顧問所。新WG委員（cf. No. 22） → ミスプリ（磯部氏は国際協力WGと辞める）

議長：運営委員の承認は問題があるので、先に事務局の承認について → 拍手「はじめ」ということについて説明して欲しい。

小暮：運営委員会としては大まかな方針の変更と認識し、次の二つの方法と考える。  
(a) 新運営委員を再選挙する。

(b) 7月頃レンボジウムを持つこととし、それまでに活動方針を作り、その時開く総会で新運営委を選出する。

菊池：天文台有る意見の中味を説明して欲しい。どんな点で従来の方針と違うのか。

小平：研究では好意的であり、問題が指摘された。一つは三本柱の具体的なステップが不明なこと、もう一つは具体的な部分だけ取り出すと、投資に見合うだけの正当性があるかと云うこと。日本の天文としてはかなりの投資になる。もっとメリットのある分野に進出してはどうか？ いいサイトに出ることと考えるとどうか？ 等々あり。国内3mと云うことは、天文内部も隣接分野も認めることがかなり困難。研究委員長、東京天文台長の古在氏が、東京天文台3mと海外設置の可能性を全く取り上げて検討することは難しいとの認識を持っている。また京都大学では、長谷川氏を中心として、赤外線望遠鏡の海外設置計画と概算要求に載せる竹まで行っている。各委員の中にも、国内3mと云うことのscientific justificationがかなり難しいという気持ちが生じて来た。かつての議論とは異なり、国内と国外のタイムスケールが同程度ではないかと思われたい。現在では海外と除外する理由は何らないであろう。

菊池：研究の結論とは一体何なのか。対応に幅があるというように感じている。この問題で多くの時間を費やして来た。

杉本：あるboundary conditionのもとでは研究でも意見は出た。問題はboundary conditionが変ったために今日に至る。この中で、それは研究の意見の受けとめ方といふ、たよりの問題ではない。文部省の対応とある程度assumeしていたのに関連、ていつのどすべでゴチャゴチャになる。この中で是非いふ。

寿岳：文部省をスケープゴートにするとおっしゃるのか

小平：国内3mのタイムスケールが予想以上に長いというのは当初と違うこと。海外のタイムスケールXはまた本気で考えているから、本気で組み立てればXの真の通は知れない。Xのfeasibility studyをやることができたということからboundary conditionの進化と云うこと。天文研究機関の再編成と云うことも一要因である。こういう大まかい問題とやら、海外の話も打診するのではという雰囲気になり、た。

杉本：私の言、其意味はその通り。そういう事態になり、たので東京天文台の先生方が考えが変った。

安藤：このまま終わるとキレイごとで終ってしまう。形式的な問題では済まされたい。我々は従来から海外を主張してきたが、それは東京天文台にまじまじいと言った抑えられてきた。scientistとしてfairな議論をすべきだったと云う悔みが残る。非生産的な議論を止めてfairな議論をして欲しい。

寿岳：精神的には同じ意見である。

議長：小暮提案をどう扱うか。

奥田：過去のことと云うことは仕方ない。運営委員が辞めたらどうするといふ、た容易な問題ではない。これからどうするかを決めるべきである。体制も含めて全国の問題としても一度考え直すべきである。計画の立案に全国の意見がよく反映できるように形式を整えるべきである。

杉本：同じ意見である。今回の選挙でもメチャクチャに選んだ訳ではなく、将来の中心的人を選んだはずだから、やってみよう、たらよい。重要な時に選挙をどう空白期間がどうなるかは良くない。

小暮：9月の運営委で白紙に戻りたいと思っていた。自分としては拡大研究と深刻に受けとめていた。しかし委員長として天文連の先頭に立ち、た。気持ちの整理がついていないので、形式的にせよ何らかの汽れがある方が、よりするのにはいいかと思う。7月のレンボジウムはその場になることを期待している。

議長：再選挙と7月のレンボジウムで確認するという二つの方法がある。運営委がなくなるとは思わないので、いすかたせよ7月まで暫定運営委で行くことにしなすか？

奥田：今の選挙方法だと全運営委員が東京天文台の人になる可能性もある。新しい提案として、運営委に地区代表を入れる案、天文台長は職務として入る案と考える。

杉本：今の議題から外れていて、ここで議論すると時間がかかってしまう。

議長：再選挙とやらと選挙方法も議論しなすか？

杉本: 運営委員は現状通り。委員長選出にあたり、これは小暮氏の意見と取り入れるという提案をした。

内田: 研建との状況過程で事態が重なり、たまにというように話されている。国内が難しくなると、たまにこれは確かだ、これだけが事態の変化である。海外が易しくなると、たまにということでは決してない。東京天文台長の free hand が欲しいと言っていることは、海外にたまにということと意味しているのではない。研建では三社一律はダメだが、たまにものからということならかなり好意的であった。東京天文台は自決機関であらう。外的状況だけが動くものでない。もしここで小暮氏が決めて「海外」という決断としても、その通りにはならぬかも知れない。東京天文台は海外に決めたという款では決してしないのだから、drastic な変化があった款では無いのでいろいろ検討しても困る。しかし、日本の天文の将来を考えて、研究者が海外をやるということに、たまたま可能性が出てきた。ただし、東京天文台ではまだ何も話していない。

小暮: 光天連で海外に決めたということでは決してない。その可能性を含めて最初から考え直す方がよいということである。国内3mということも東京天文台に申し入れとしたが、台長の判断ではかなり難しいという経緯もある。

長谷川: 内田意見に関しての印象。東京天文台は #1 には autonomy をもつ機関であり、#2 には他の分野も含んでいる。たとえば該大研建では太陽宇宙の計画も出された。どのプロジェクトを推進するかは東京天文台が決めるべきことである。大きい施設とどのような体制で共同利用に付するか。海外ととも共同利用研ということになり、東京天文台の現状にも様々な問題となる、といったようなことか？

内田: 外部から枠をはめて、東京天文台がその通りにそれというように言っている方とそれともよくまるとは限らない。天文台自身の本気で腰を据えて取り組む気にはなるとダメということ。

議長: 時間がなくて、どうしてもやらなければならぬことのみに限る。杉本提案についてお答え。

長谷川: 今までのやり方で意思の疎通と欠けている点はどこかという意見とこの場によく聞いて、それに留意して現運営委員にやらせようということか。

奥田: 同じ意見である。

森原: 各機関の意見とよく集約して運営委員を作るべき。冒田氏から地区代表と入札という提案もある。海外中口径と密接に関わる京都の赤外線望遠鏡計画は運営委員で priority を持つ議論して欲しい。

磯部: 運営委員として条件を課せられようことは当然のことだ。これまでも認識していたつもりである。従来、一見賛成のような収集をしたことが度々あった。自分達の計画だからと他人意見を言うという態度が全員にないという運営委員としてもやりきれない。自分達の意見は強めて持っているので、それを充分戦わせて集約するという態度が必要。三本柱計画は皆が一貫して主張し通して来たものと信じている。他から(東京天文台、他分野)の圧力を充分抵抗できるように固執力を残すには

から。運営委員としてもっと多くの人の意見を集約すべきだ、ということ反響はあるが、各人も一度とこんど失敗と繰り返さないようよく認識して欲しい。

議長: 時間が多く全員の気持ちも統一されていよいよなので、ここは決めず、7月のシンポジウムで再議するがしなやかに決めることにして、7月までは現状の暫定運営委員で行くことを提案する。

小暮: 杉本氏の動議は決まるともその方が、長谷川、奥田氏の動議もある。

長谷川: 私の提案は、(1) 現運営委員を承認、(2) この席の意見を尊重する(しばらくは)ということである。

小暮: 持ち上げはじめとつけたという気持ちである。それと云わなければならぬがともかく7月まで方針は出せない。

議長: 今夜選ばれた運営委員を承認する案について決まると。

結果 賛成 35 (会場での報告は34だった。教えてくれた前原氏が合算していた) 反対 10 棄権 7

よって、現運営委員を承認されました。運営委員長に推薦者が居れば出して欲しい。

磯部: 小暮氏にお礼をした。

森原: 賛成

小暮: 7月までという条件付である。

磯部: シンポジウムは7月上旬の2-3日。詳細は今日運営委員で決めて会報で知らせる。

(文責 岡村亮矩, 田中 清)

「光学・赤外線望遠鏡将来計画シンポジウム - 1983.7」

開催のお知らせ

1. とき: 1983年7月12日(火), 13日(水) 2日間(午前・午後)
2. ところ: 国立科学博物館 (東京上野)
  - 5日, 11日(月)夕に運営委員会(東大天文学教室にて)
  - 13日(水)午後臨時総会(会場にて)
  - と開催します。

3. 開催主旨

5月総会で報告されたように(本会報参照)、従来の光天連の三本柱方針は再検討を迫られています。そこで、今後の光天連の活動方針と決定するにため、本シンポジウムでは、あえて「望遠鏡が欲しい」という以外の全ての枠を取りはらひ、基本的向

- 題から自由な形式で討論を行いたいと思います。内容としては、
- A. 2年間の活動の結果がなぜ今回のように事態に至ったのか、こうしたことを再び繰り返さないようにするにはどうすればよいか。(情勢認識, 組織, 運営の問題点)
  - B. 長期の視点に立った光学・赤外天文学研究の展望(サイエンスの問題)と研究と推進するにあたり、その基本的な原則の立て方(大型望遠鏡はなぜ必要か、赤外觀測はなぜ必要か、NTTなどのように考えるか、体制はどうするか)
  - C. Bに基づいた具体的計画(望遠鏡, 付属装置の開発とそのタイムスケール)を考えています。

4. 多くの会員の意見表明を求めます。

講演と申し込まれる方だけでなく、意見のある方はその要旨をあらかじめ世話人までお寄せ下さい。なお寄せられた要旨は事前に会費に配布の予定ですのでお含み下さい。

宛先: 〒113 東京都文京区弥生2-11-16 東京大学理学部天文学教室  
田中 清 TEL. 03-812-2111 内4262  
メ切: 6月20日

5. 旅費について

本年は本会のみで決まっていた統研が通らなくなった見通しなので、旅費はたいへん多岐にわたります。現在財源と巧術中ですので、必要の方は申し出ていただきますが、できるだけ自前で調達するように努力して下さい。

シンポジウム世話人

田中 清 (東大理)  
山崎 篤磨 (東大教養)  
平田 龍幸 (東大理)

第23回運営委員会報告

日時 1983年5月19日 21:00 - 22:30  
場所 東京天文台講堂  
出席 委員: 美古, 岡村, 小暮, 清水, 磯部, 寿岳, 中橋, 田村, 平田, 石田,  
小平, 若松, (欠席) 西村, 山下, 佐藤,  
委員外: 田中清, 前原, 富田, 山崎, 津田, 中桐, 野口, 小矢野

議題

1. 第5回定例会のまとめ

敵今7 国内3m, 海外中口径, NTTの三本立てを基本とする従来の光天連の基本方針が大型を海外に持ち出すという可能性も含めることにより変更された。この運営委員会の認識を承認し、新年度の活動方針は7月シンポジウムおよび臨時総会を開いて討議し決定することとした。

運営委員の改選については3月に選出された新委員を承認した。ただし、運営委員長は7月シンポジウムまでの暫定である。

2. 7月シンポジウムについて

7月シンポジウムの目的 国内に3m超口径望遠鏡を早急に作るという従来の方針が困難になったという認識に立ち、望遠鏡建設を含む光学赤外天文学将来計画を幅広く再検討して昭和58年度光天連活動方針をまとめあげる。

日程 7月12日(火) 午前 シンポジウム  
午後  
7月13日(水) 午前  
午後 光天連臨時総会

なお、7月11日(月)午後5時30分より運営委員会を聞く。(於東大・理・天文学教室) また、臨時総会終了後も必要に応じて聞く。

会場 科学博物館(東京・上野)  
世話人 田中清, 山崎篤磨, 平田龍幸

討論の要旨

議題1, 2に関連して多くの議論があった。主なものを要約する。

Ic 総会では従来の光天連の方針の変更が承認されたと考えてよいが、

Kg 総会に活動方針が提出できなくて、7月にすべての問題を洗いざらい出すということでは承認されたと考えてよい。

Kg 光天連としては 国内3mを早急に作るという案が難しくなったという認識に立っ

- たもので、それもよめたわけでもないし、それ以外の変更もない。
- Ka 台長の意向は海外を最初から除外して話をするのは難しいというもので、海外を考  
えてもあかしくなくなったという実際の状況もできています。
  - Kb 海外を除外しないか考えるというても、望遠鏡だけではなく、NTTをどう考  
えるか、海外中口径の取り組みをどうするか、体制をどうするか等、多くの問題があり、  
再編成のタイムスケールもあわせ考える必要がある。
  - J あまりにも多くの議論があるので一つ一つの議論もしにくい。  
NTTについても全く異なった意見がある。Xの値の推定にも意見が分かれている。
  - Is 国内ががえって難しいということなら、海外を一先人命やるべきである。われわれ  
として主張すべきプランを作るべきであって、並列ではよくない。
  - Ka につくらしい案を考えるのが精一杯ではないか。
  - Is これが光天連案だということを主張すべきである。
  - Is 東京天文台台内連絡会(5月16日)の議論のまとめ。  
・推進体制をつくる(小平・西村氏を核とする)。  
・準備室を作りたいという希望もある(informal)。
  - Ka 当面10名位グループで月1回くらいの規模で会合を開き、問題を整理する。
  - Ok 推進体制という意味では全国の見解をどう集約するかという点も重要である。
  - J 運営委員はオープンなので、出てきた意見を言うてもらうことだ。
  - Mh 今まで運営委員は何となくしきいが高かった。しきい(ギャップ)を埋める努力を  
会員と運営委員の双方ですべきである。
  - Wk 光天連はサイエンスだけやるどころか、政治問題までやるどころか、光天連と東京  
天文台の関係がすっきりしない。
  - Tp 政治には限界がある。サイエンス+テクノロジーにウェイトをかけた方がいいので  
はないか。西村・小平という核は光天連と東京天文台とのパイプ役と考えてよいが、  
Kb そうなりたいと考えている。今のところ光天連より天文台内部のコミュニケーション  
が難しい。
  - Aa 光天連で海外と言わなくなったのは絶望感による。東京天文台の力が強すぎる。天  
文台内の人々がはっきり考えを固めて立場を示すことが必要がある。
  - Wk 光天連は全国組織なのに東京天文台にはごうられている。外部の人々は天文台の事情  
にふりまわされている。
  - Is 運営委員はいつもどういう路線をいくのかを確認している。反論なら東京天文台にア  
ンチテーゼを出すという気がやらなければ。
  - J シンポジウムのテーマは何か?
  - Is NTTに行くための外国の望遠鏡のサーベイとマンパワーのサーベイ。
  - Kb 光天連の最終目標であったNTTをどう考へるかは重要。それと京都で一歩ふみ出  
している海外中口径も、海外大型と絡むので問題となる。
  - J 大型計画を一つやったら当面次の金は出ない(～15年)。海外大型をやった次にす  
ぐNTTということはない。

- Is それをどう認識するかがシンポジウムの重要な課題である。
- Id 光天連はサイエンスとテクノロジーを中心にやるべきである。突っ込みの執行に際し  
ては本実行機関にのみフリーハンドを手立て、光天連は精神的サポートを手え  
るというので良いのではないが。
- Ka NTT計画は計画としては出ているが、日本では臨場感をもってとりくめるという  
状況にながった。
- Kg 国内3M計画にもNTTへの大きな推進努力があった。
- Wk 海外4MとかNTTとかはいつまでに出来なければならぬとか、サイエンスでき  
められることを早くできめていくのが光天連の仕事ではないか。
- Kg 今回このシンポジウムは議論のワケをきめずに openな議論をよんだらう。
- Tp 昨年このシンポジウムはワケがありすぎた。
- Is 世話人は発表者とアブストラクトを届け出たプログラムを作る係とするべき。
- Kg 東京天文台のメンバーは一つは限らないが可能性のあるモデリングをやっ  
てほしい。その他は百家争鳴でもよい。
- Id 現在の東京天文台はこういう案を出す状況にない。案を出して光天連が認めるとい  
う事態は良くない。外から押しつけるという形になってもよくない。
- Tm 個人として出せばよい。
- Kg 議論の夕夕キ台ということである。
- Hr 会報No.22の四原則(確認済み)の尺枠をすてるのか。
- Kg 捨てるにしても、異なった意見を排除するわけにはいかないだろう。

(文責:小暮智一)

(注) 討論にあるXとは 予算が認められてから建設に着手す  
るまでの期限というほどの意味で用いられた。

### 「会員の声」

わが光天連は現在、極めて不幸な事態に立ち至っている。その面目は完全につぶれ  
ただけでなく、立ち遅れた状況の下でさらに2、3年のまわり道をしたことがはっきり  
した。ここで我々は、光天連の過去と現状について、皆で謙虚に反省しなければなら  
ない。しかしながら、立場によりなすべき反省の内容・深さに差があることは、自ずか  
ら当然である。

光天連を指導してきた、またいつかある人達には、畢竟おごりがあったときわきも  
得ないし、責任は重いことを自覚していただきたい。どれだけ広く自ら可能性を考へ、  
また他者の声に耳を傾ける努力をしてきたといえようか。2年前の時点で、すでに  
今日の事態を予想する声も、一部にはあったのである。iterationの必然的な過渡だとい  
う説明はせず。試行錯誤はよに立つ人達には許されないが、社会常識である。

一方、若手はもっと関心ももらねばならない。この期に当たって、5月12日の総会ではごしちの議論の盛り上がりは良かった。随分このところ、天文連での議論がクロウト節的になりすぎ、また運営面中心になって、活発な議論がなされた。それにしても、その時の院主・ODの低い出席率はどうしたことだろう。いかに懸念してほしい。この望遠鏡の output を最初に中心として受け取るのは自分達であることと意識をこめてほしい。

我々は今、苦しい状況の下ではならぬ試行錯誤をしてみよう。今年こそ原点に立ち返り、衆智を集めて、内にも外にも読得力のある望遠鏡計画とその推進体制を作り上げようではないか。天文連の真価を回復する時は今を待たない。

(小倉勝男)

### 「お知らせ」

#### 望遠鏡ワーキンググループ

日時 7月4日 午後1時 - 5時  
場所 東京大学理学部天文学教室会議室

以下のような国際シンポジウム・コロキウムが開かれます。(8-9月)

- \* "Astronomy with Schmidt-type Telescopes" (IAU Colloquium No.78).  
August 30 - September 2, 1983, Asiago, Italy.
- \* "Eighth Symposium on Photoelectric Image Devices" (SPIE Conference).  
September 5 - 7, 1983, Imperial College, London, England.
- \* "Advanced Technology Optical Telescopes II" (SPIE Conference).  
September 5 - 6, 1983, Imperial College, London, England.
- \* "Instrumentation in Astronomy" (SPIE Conference).  
September 7 - 9, 1983, Imperial College, London, England.
- \* "Observational Test of the Stellar Evolution" (IAU Symposium No.105).  
September 12 - 16, 1983, Geneva, Switzerland.

### 事務局より

今年度の事務局は、東京天文台本管観測所を中心として構成いたします。本管は温床の片田舎ですので、郵便など情報の伝達が遅い、印刷・出版の設備が貧弱であるという、事務局としての短所をかかえています。

考えてみますと、私たちがのように中央から離れた場所にいる者ほど「会報」の恩恵を受けられたわけですから、今回は少しでも give できればと思ひ引き受けさせていただきました。よろしくご支援願います。

事務局の人員構成は  
総務：前原英夫、 運営：岡村定矩、 会計：赤柳 勝、  
と責任者としていますが、東京天文台(三鷹)の  
野口 猛、辻 隆、

の両氏にも仕事を分担していただくつもりです。

本会は滞り以来3年目になります。お盆・運営委員会が記録簿などで報告されていいますが、今は現在一つの転機を迎えております。これは、やはり本会の目標である「光学・赤外天文学の発展」ということを見失わないように、「本気」で取り組むことであると思われれます。

そこで一つの試みとして、会報に「会員の声」という新しいコラムを設けます。これは、会報が会員へ情報と素直「お知らせ」としてだけでなく、会員からの意見を反映する場であるべきだと思うからです。会の活動や運営に関するご意見などありましたら事務局までお寄せ下さい。なお、掲載については事務局に一任願います。

本会の運営は、いままでもないことですがすべて会費で賄われています。さうしてそれが会費の納入を不願いいたします。現在「郵便振替」口座を手続き中ですが、今回は間に合せることができました。そこで、目下からは現金書留でお送りいただくか直接手渡していただくかしかありませんが...

#### 事務局(連絡先)

〒399-56 長野県本管郡上松町小川1935  
東京天文台本管観測所上松連絡所  
光学天文連絡会事務局 前原英夫  
電話 026452-3360